

ケース 7.2 1990-1991 年の湾岸戦争危機の時代

第一次湾岸戦争は大量の移民を引き起こした。とくに外国人労働者の避難民化が大量に発生した。しかし、驚いたことに 2003 年のアメリカ軍が中心の多国籍軍がイラクに侵攻した際には、大量移民の発生はほとんど予測されなかったのである。それが間違っていたことは後に証明された。

1973 年の原油価格高騰を導いたオイル・ショックの後に豊かになったペルシャ湾岸産油諸国は、アラブ地域やアジア地域の各国から外国人労働者を、建設労働者あるいは工業労働者として雇い入れることになった。最初は男性労働者を雇用したが、後にはフィリピンやスリランカから女性を家事労働者として雇用し始めた。クウェートでは、さまざまな仕事で働く外国人労働者の間に外国人への扱いをめぐる不満が高まり、後にイラクとクウェートの間の緊張を高める大きな要因のひとつとなった。1990 年の湾岸危機の当初にイラクには 110 万人ほどの外国人労働者がいた。そのうちの 90 万人はエジプト人であり、10 万人がスーダン人であった。クウェートは 150 万人の外国人を受け入れていたが、それは全人口の 3 分の 2 に相当していた。外国人の主な出身地は、ヨルダン／パレスチナ (51 万人)、エジプト (21 万 5,000 人)、インド (17 万 2,000 人)、スリランカ (10 万人)、パキスタン (9 万人) そしてバングラデシュ (7 万 5,000 人) であった。

イラクがクウェートを占領した後に湾岸戦争が生じ、その結果、外国人労働者の大量出国が生じた。ほとんどのエジプト人はイラクを離れたが、数万人ほどのパレスチナ人と他の外国人たちはクウェートに避難した。おそらく、100 万人ほどと見積もられているイエメン人は、イエメン政府がイラクを支持したときにサウジアラビアから強制的に出国させられた。あわせて 500 万ほどの外国人が避難したため、東南アジアから北アフリカの各諸国は、海外送金や所得の多くを失うことになった。

湾岸戦争が示唆することは、史上初めてのことだと思われるが、現代の国際関係における移民の中心性である。移民は潜在的な破壊者であり、ときには敵の同調者であるとアラブの主要な指導者からみなされ、国内・国際関係においてしばしばスケープゴートにされてきた。暴力紛争が発生すると大量虐殺の対象となった。暴力的国際対立の後に国際関係の再編が起きるが、それはアラブ地域やその周辺の社会や政治に甚大な影響を与えてきたのである。

【参考文献】

Segal, A. (1993) *An Atlas of International Migration* (London: Hans Zell).

Birks, J. S. and Sinclair, (1980) *Arab Manpower: The Crisis of Development* (London: Croom and Helm).

Martin, P. L. (1991) 'Labor Migration in Asia' *International Migration Review*, 25:

ケース 7.2 1990-1991年の湾岸戦争危機の時代

Spring.